

抑うつおよび不安傾向と自己認知バイアスの関連性の検討ⁱ

川上 彩子*・松田 英子**

要 約

先行研究では、抑うつや不安の感情の生起や維持には、ネガティブ情報の自己関連付けおよび処理が強い影響力を持つと指摘されている。また、抑うつと不安の症状は併発することが多い。本研究は、抑うつと不安の自己認知バイアスをネガティブ情報とポジティブ情報から再検討し、これまでの研究結果の頑健性について確かめるとともに、一方の効果を統制した際の、抑うつ認知バイアス（不安の影響をコントロール）と不安認知バイアス（抑うつの影響をコントロール）を比較検討することを目的とした。その結果、(a) 高抑うつ者、高不安者の双方において、ネガティブな自己認知バイアスがみられ、(b) 非抑うつ者、非不安者の双方において、ポジティブな自己認知バイアスがみられたが、偏相関分析により (c) 自己認知バイアスの原因は主として不安の影響を強く受けた結果であると考えられた。

キーワード：自己認知バイアス、抑うつ、不安

1. 問題と目的

抑うつや不安感情の生起、維持には、自己概念に関連する否定的情報の処理が強く関連しており (Wells & Matthews, 1994)、その情報過程で示す特定の偏り、即ち自己認知バイアスについての研究が蓄積されてきた。例えば、高抑うつ者は否定的情報の再生数が多く (鳥丸, 2009)、高不安者では単語完成課題における否定的情報に対する潜在記憶バイアスが確認されている (坂元, 1998)。そして臨床的なうつ病や不安障害には、強い否定的バイアスがみられる (福井, 2002)。

抑うつも不安も精神障害にみられる一般的な症状で、うつ病性障害の生涯有病率は約 20%、不安障害は約 30% である (袴田・田ヶ谷, 2011)。うつ病性障害と不安障害は合併診断も多いが (Kessler, Nelson, McGonable, Liu, Swartz, & Blazer, 1996)、不安障害の診断がうつ病性障害

の診断に先行する方がその逆より多く (Clark, 1989)、抑うつ症状のない不安障害はよくみられるが不安症状のないうつ病性障害はほとんどみられない (福井, 2002) という指摘がある。このように、抑うつと不安は別症状ながら強い関連性が認められる。

しかし認知バイアスに関する先行研究では坂元 (1998) 以外で抑うつと不安傾向を同時に測定した研究はほとんどなく、かつどちらかの影響を統制した効果を検出した研究はみられない。よって本研究では、自己認知バイアスを取り上げ、これまでの非臨床者を対象とした研究結果の頑健性について再検討を試みるとともに、一方の効果を統制した抑うつ認知バイアスと不安認知バイアスを比較検討することを目的とする。さらに否定的刺激を用いた認知バイアスの研究は多く行われているが、肯定的刺激との対比が重要という指摘もあり (西口・丹野, 2012)、否定的刺激に加え肯定的刺激を提示して検証を行う。

2014年11月30日受付

* 日本福祉教育専門学校 精神保健福祉学

** 江戸川大学 人間心理学科教授 臨床心理学

2. 方法

2-1. 予備調査

大学生 20 名を対象に、本調査で用いる性格特性形容語（以下、形容語）抽出のため予備調査を行った。鳥丸（2009）の特性形容語リスト 46 対 92 語について、各語の日常での使用頻度を 5 段階で回答を求めた。そのうちアクセシビリティの高い 25 対 50 語を抽出した。

2-2. 本調査

2-2-1. 調査協力者および手続き

112 名（男性 51 名，女性 61 名，平均年齢 20.33 ± 0.80 歳，有効回答率 98.2%）の非臨床者の大学生に協力を得、講義後に質問紙調査を行った。質問紙は、フェイスシート、BDI-II 日本語版（以下、BDI; Beck, Stree & Brown, 1996 訳小嶋・古川, 2003）、STAI 特性不安尺度（以下、STAI; 肥田野・福原・岩脇・曾我 & Spielberger, 2000）、予備調査で抽出した形容語 25 対 50 語（鳥丸, 2009）から構成されていた。形容語は、対で提示した肯定語、否定語両方に関し、自身の性格がどの程度当てはまるかを各 5 段階で評定を求めた。倫理的配慮として、回答は無記名で成績とは無関係であること、強制でなく随時中止できること、個人情報保護の保護に取り組むことを調査前に教示した。

2-2-2. 分析方法

BDI, STAI 得点を各カットオフポイント（Beck et al., 1996; 肥田野ら, 2000）に基づき、以下の 3 群に分類し、これらを独立変数とした。BDI 得点 10 点以下を非抑うつ群（48 名）、11 から 16 点を低抑うつ群（32 名）、17 点以上を高抑うつ群（32 名）とした。STAI 得点 44 点以下の男性、40 点以下の女性を非不安群（27 名）、45 から 53 点の男性、41 から 50 点の女性を低不安群（28 名）、54 点以上の男性、51 点以上の女性を高不安群（58 名）とした。

従属変数は、形容語（肯定・否定）各評定の合

計を肯定語得点、否定語得点、肯定語得点から否定語得点を減算した差得点とした。差得点は高いほど肯定的な、低いほど否定的な自己認知バイアスを示す。

3. 結果

3-1. 抑うつ群の分析

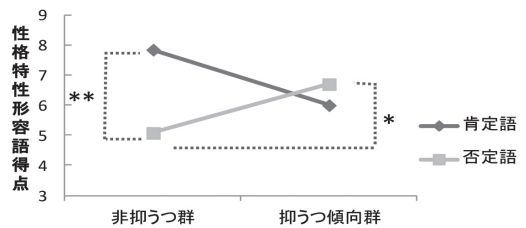
形容語得点（肯定・否定）と抑うつ群（非・低・高）の 2 要因分散分析を行った結果、有意な交互作用がみられた ($F(2,106)=6.39, p<.01$)。単純主効果の検定を行った結果、非抑うつ群と高抑うつ群の形容語得点に有意差および有意傾向がみられ ($F(1,106)=12.39, p<.01; F(1,106)=3.17, p<.10$)、また、非抑うつ群に比べ低抑うつ群、高抑うつ群の否定語得点が高かった ($F(1,106)=12.39, p<.05; F(1,106)=3.17, p<.01$)。

差得点を従属変数として抑うつ群（非・低・高）の 1 要因分散分析を行った結果、有意な交互作用がみられ ($F(2,109)=7.63, p<.01$)、非抑うつ群は否定語得点に比べ肯定語得点が高く、高抑うつになるに従い否定語得点が上昇することが示された ($F(2,106)=6.39, p<.01$)。

非抑うつ群は肯定的な自己認知バイアスを持ち、高抑うつ群は否定的な自己認知バイアスの傾向をもつことが示された。

表 1 各抑うつ群の性格特性形容語得点および差得点の平均 (SD)

| 群 | N | ポジティブ語得点 | ネガティブ語得点 | 差得点 |
|-------|----|--------------|--------------|--------------|
| 非抑うつ群 | 48 | 81.26(9.20) | 75.01(10.77) | 6.25(13.04) |
| 低抑うつ群 | 32 | 81.42(12.17) | 80.51(10.35) | 0.91(12.81) |
| 高抑うつ群 | 32 | 79.69(10.26) | 84.48(9.51) | -4.69(13.04) |



** $p < .01$, * $p < .05$

図 1 性格特性形容語得点の抑うつ群別比較

3-2. 不安群の分析

形容語得点（肯定・否定）と不安群（非・低・高）の2要因分散分析を行った結果、有意な交互作用がみられた ($F(2,106)=18.68, p<.01$)。単純主効果の検定を行った結果、非不安群、高不安群の形容語得点に有意差、低不安群の形容語得点に有意傾向がみられた ($F(1,106)=27.12, p<.01; F(1,106)=8.93, p<.01; F(1,106)=2.94, p<.10$)。また、高不安群に比べ非不安群、低不安群の肯定語得点に有意に高く ($F(1,106)=12.39, p<.05; F(1,106)=3.17, p<.10$)、否定語得点において非不安群に比べ低不安群、高不安群の否定語得点が高かった ($F(1,106)=12.39, p<.05; F(1,106)=3.17, p<.10$)。

差得点を従属変数として不安群（非・低・高）の1要因分散分析を行った結果、有意な交互作用がみられた ($F(2,109)=18.90, p<.01$)。非不安群と低不安群の差得点、非不安群と高不安群、低不安群と高不安群の差得点に有意差がみられ ($F(1,106)=12.39, p<.05, F(1,106)=3.17, p<.01; F(1,106)=3.17, p<.01$)、非不安群は否定語得点に比べ肯定語得点が高く、高不安になるに従い否定語得点が上昇することが示された。

非不安群は肯定的な、高不安群は否定的な自己認知バイアスをもち、低不安群は肯定的な自己認知バイアスをもち傾向があることが示された。

表2 各不安群の性格特性形容語得点および差得点の平均 (SD)

| 群 | N | ポジティブ語得点 | ネガティブ語得点 | 差得点 |
|------|----|--------------|--------------|--------------|
| 非不安群 | 27 | 82.94(10.52) | 71.23(11.20) | 11.71(13.07) |
| 低不安群 | 28 | 84.14(10.41) | 80.36(11.38) | 3.79(13.04) |
| 高不安群 | 58 | 78.31(10.58) | 82.59(11.28) | -4.27(12.88) |

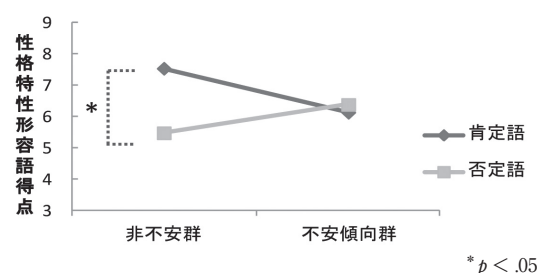


図2 性格特性形容語得点の不安群別比較

3-3. 偏相関分析

不安を統制した、BDI得点と形容語得点および差得点の偏相関係数を算出した結果、BDIと肯定語得点、否定語得点、差得点のいずれにも有意差はみられなかった ($r=.11, n.s.; r=.14, n.s.; r=-.03, n.s.$)。

一方、抑うつの影響を統制した、STAI得点と形容語得点および差得点の偏相関係数を算出した結果、STAIと肯定語得点に負の相関、否定語得点に正の相関、差得点に負の相関がみられた ($r=-.23, p<.05; r=.22, p<.05; r=-.39, p<.01$)。

4. 考察

非抑うつ者、非不安者の双方に肯定的な自己認知バイアス、高抑うつ者、高不安者の双方に否定的な自己認知バイアスが確認され、低不安者に肯定的バイアスの傾向がみられた。低抑うつ者にはいずれのバイアスもみられなかった。

学生を対象に抑うつ傾向と自己認知バイアスを検討した鳥丸(2009)では、抑うつ低群は否定的な側面からの自己評価が低く、抑うつ高群はバイアスをもたず正確な認知をしていた。鳥丸(2009)の抑うつ低群のBDI得点の平均は1.00、高群の平均は16.75で、本調査では非抑うつ群と抑うつ低群にあたる。よって、本調査の非抑うつ群および抑うつ低群の自己認知バイアスに関する結果は先行研究の知見を支持している。

不安を統制した場合抑うつと形容語得点および差得点に相関はみられなかったが、抑うつを統制した場合不安と形容語肯定語得点と差得点に負の相関、否定語得点に正の相関がみられた。高不安者の潜在記憶バイアスは強い効果を持つという指摘(坂元,1998)と合致し、自己関連づけ課題で測定する自己認知バイアスは相対的に不安の影響が強いことが本研究で新たに得られた知見である。

総括すると、非抑うつ・非不安者は自己関連否定的情報の処理が少なく、肯定的に歪めて捉え、高抑うつ・高不安者は自己関連情報を否定的に歪めて捉えることが示された。一方、低抑うつ・低

不安者は偏りがなく現実的な認知をしているといえる。よって高抑うつ・高不安者が精神的健康を維持するためには、否定的情報を処理しすぎず、現実的な認知の必要性が示唆された。うつ病性障害と不安障害の臨床者で追試することが今後の課題である。

参考文献

- Beck,A.T., Stree,R.A., & Brown,G.K. (1996). (訳) 小嶋雅代・古川壽亮 (2003). 日本語版 BDI- II 株式会社日本文化科学社
- Clark,L.A. (1989). The anxiety and depressive disorders: descriptive psychopathology and differential diagnosis. In P. C. Kendall & D. Watson (Eds.), *Anxiety and Depression*, Academic Press, pp.83-129.
- 福井至 (2002). 抑うつと不安の関係を説明する認知行動モデルの構築と検証 風間書房 Pp. 2-16.
- 袴田優子・田ヶ谷浩邦 (2011). 不安・抑うつにおける認知バイアス——認知バイアスアプローチの誕生 *日本生物学精神医学会誌*, **22**,227-291.
- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子 & Spielberger,C.D. (2000). 新版 STAI 特性不安尺度 実務教育出版
- Kessler,R.S., Nelson,C.B., McGonable,K.A., Liu,J., Swartz, M. & Blazer,D.G. (1996). Comorbidity of DSM- III -R major depressive disorder in the general population : Results from U.S. National Comorbidity Survey. *British Journal of Psychology*, **168**,17-30.
- 西口雄基・丹野義彦 (2012). 抑うつの注意バイアスに対する刺激の自己概念関連性の影響 *パーソナリティ研究*, **21**,91-93.
- 坂元桂 (1998). 抑うつ者および高不安者の否定的情報に対する潜在記憶 *性格心理学研究*, **6**,71-81.
- 鳥丸佐知子 (2009). 軽度の抑うつ者における認知心理学的研究 風間書房
- Wells, A. & Matthews, G. (1994) . *Attention & Emotion: A Clinical perspective*. East Sussex, UK: LEA
- Cognitive bias of self traits for negative and positive information in depression and anxiety
- A previous study indicated that cognitive bias of self traits for negative information processing affected occurrence and persistence of depression and anxiety. In addition, depression and anxiety popularly coexist. This study investigated the cognitive bias of self traits for negative and positive information in depression and anxiety, in case of controlling the effect of either feeling. Our results indicated that (a) both highly depressed and highly anxious people showed negative bias of self traits, (b) both non- depressed and non- anxious people showed positive bias of self traits, and (c) cognitive bias of self traits was more strongly affected by anxiety rather than depression by partial correlation analysis.

Keywords: cognitive bias of self traits, depression, anxiety

i 本研究の成果は、日本パーソナリティ心理学会第22大会において発表したものである。